

GLOBAL EDGE

【グローバルエッジ】

SOCIAL COMMUNITY MAGAZINE
2023 SUMMER NO. 74

GLOBAL EDGE

J-POWER

NO.74 2023 SUMMER

特集 異なる立場を思う

HOME
of J-POWER 愛媛県宇和島市・愛南町

就任のごあいさつ

エネルギーの安定供給と気候変動対応を両立させ、日本と世界の持続可能な発展に貢献します。

このたび私どもは、6月28日に開催された定時株主総会および総会後の取締役会を経て、会長および社長に就任いたしました。

私たち J-POWER グループは「人々の求めるエネルギーを不断に提供し、日本と世界の持続可能な発展に貢献する」という企業理念に基づき、70年以上にわたり安定的かつ効率的な電力の供給に努め、グローバルに事業を展開してまいりました。

そして現在、エネルギーの安定供給と気候変動対応の両立は、未来に向かって人類文明が持続していく上で最も重要な課題となっております。

こうした中、J-POWER グループは2021年に「J-POWER “BLUE MISSION 2050”」を策定し、2050年のカーボンニュートラルと水素社会の実現を目標に取り組みを加速しています。

これまで国内外で長年培ってきた総合的な技術や知見を活かし、新たなイノベーションにも挑戦しながら、エネルギーの安定供給と気候変動対応の両立という地球社会の要請に応え、より良い未来を拓き続けるエネルギー企業として、一層努めてまいります。

読者の皆様には引き続き、J-POWER グループへの変わらぬご理解とご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

J-POWER
代表取締役会長

渡部 肇史

J-POWER
代表取締役社長 社長執行役員

菅野 将



菅野等新社長に聞く

社会とともに生きる企業 J-POWERが忘れない ビジョンと使命

2050年までにCO₂排出量実質ゼロを目指す「カーボンニュートラル」。
その実現に向けて電力会社ができること、取るべき姿勢、道筋とは何か。
J-POWERの新しい牽引役を担う菅野等新社長に想いを聞いた。

エネルギー安定供給と 気候変動対応を両輪で

——気候変動問題や国際情勢などエネルギーをめぐる状況は厳しさを増しています。新社長としてどのよう
な舵取りをしていかれますか。

菅野 電力を安定的、かつ安価に提
供しながら、温室効果ガスの排出を
長期的にゼロにする。この3つを同
時に、どれに偏ることなくバランス
よく実行していくことが、私たちエ
ネルギー供給に携わる企業に課せら
れた使命です。ロシアによるウクラ
イナ侵攻をはじめとする地政学的リ
スクの高まりの中で、その使命を取
り巻く情勢は一気に複雑さを増しま
した。自由貿易さえ危ぶまれるこの
状況は、エネルギー資源の大半を輸
入に頼る日本にとっても、今後経済
発展するアジア諸国にとっても大変
厳しいものです。

ですが、だからこそやり遂げる価
値があると私自身は思っていますし、
Jパワーグループの全従業員にも、
同じようにやりがいを感じてもらえ
たらと願っています。

再生可能エネルギーを拡大する、
火力発電の脱炭素化を実現する、原
子力発電にも取り組む。ほかにも、

MISSION 2050」という独自の戦略
と行動計画を発表しました。

そこでは「CO₂フリー電源の拡
大」「電源のゼロエミッション化」
「電力ネットワーク」の3つのミッ
ションを掲げていて、いずれも順調
に進捗しています。進捗度合いを測
るマイルストーンとして、2030
年までに国内発電事業によるCO₂排
出量を46%削減し（2013年度実
績比）、2050年には実質ゼロとす
る目標を立てました。電力安定供給
と気候変動対応を両輪で回すチャレ
ンジングな取り組みですが、ロード
マップに従って着実に駒を進めてい
る状況です（P・7図参照）。

アップサイクル戦略で CO₂フリー化を 早く、着実に

——カーボンニュートラル達成への
足掛かりをつかむことが、新社長の

菅野等
（かんの・ひとし）

J-POWER代表取締役社長 社長
執行役員。1961年、山形県生ま
れ。1984年、筑波大学比較文化
学類卒業、電源開発株式会社入社。
設備企画部長、執行役員開発計
画部長、同経営企画部長、取締
役副社長執行役員などを歴任し、
2023年6月より現職。副社長執
行役員の時には、コーポレート総
括、エネルギー営業本部長、原
子力事業本部副本部長などを担当。

あらゆるオプションに可能性を見出
しながら、特定のエネルギー源に依
存することなく、多面的なアプロ
ーチで突き進んでいきたいと考えてい
ます。

——2022年度の決算で純利益が
過去最高を更新しました。どのよう
に評価していますか。

菅野 過去からの長いスパンで続け
てきた事業の数々が実を結んだこと
が要因と認識しています。加えて、
昨年度は、夏より秋にかけての国際
的な資源価格の高騰が資源権益を持
つグループ会社の業績を押し上げま
した。これは、2022年度特有の
事情によるもので、これが継続する
とは考えていません。

それよりも、先ほどの経営課題に
有効な手立てを講じるべく、電力供
給の脱炭素に向けたトランジション
を一步でも前へ進めなければなりま
せん。前期の利益を最大限に活かせ
る今こそが、その好機であると捉え
ています。

トランジションというのは、日本
政府が2050年を目標年に定める
カーボンニュートラル実現に向けた
変革を意味します。Jパワーはその
牽引役を果たせるよう、2021年
2月にいち早く「J-POWER“BLUE

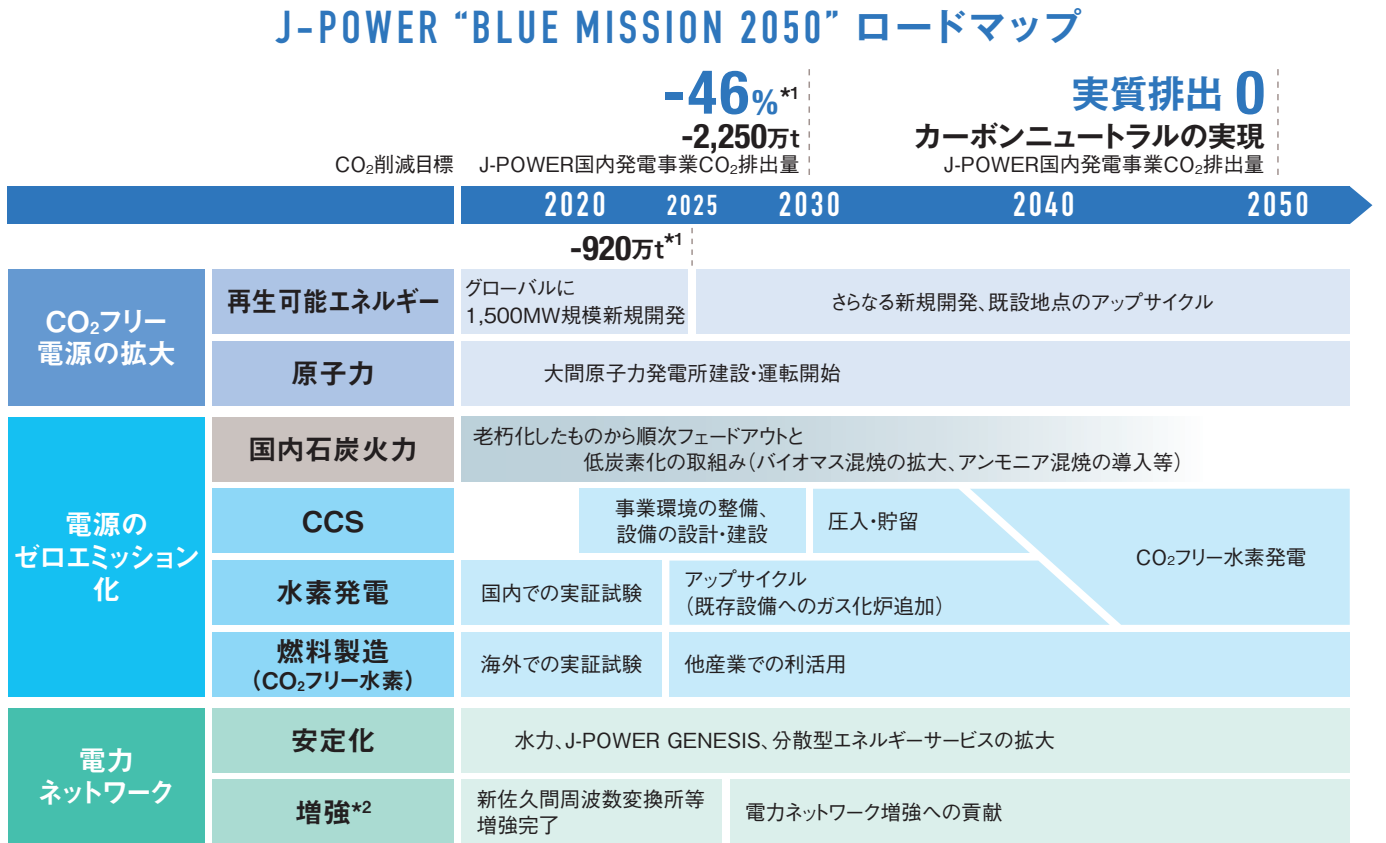
任務といえそうですね。

菅野 これは私だけでどうこうでき
るものではありません。過去の蓄積
を土台として、今の成果を確実に次
の世代へとつなぎながら、将来にお
いて間違いなく実現させる。その一
時期を全力で担うということです。
技術開発や社会実装に長い時間を要
するエネルギー事業の場合、こうし
た長期的な目線で物事を捉える姿勢
が欠かせません。

とはいえ、短期的な成果もまた同
時に求められることが、ビジネスの
難しいところです。マーケットの期
待には応えなければなりませんし、
地球温暖化の危機的状況を考えても
悠長に構えている余裕はありません。
今できることを迅速に、加速度的な
スピード感をもって実行していく必
要があります。

——具体的にはどんなことを優先し
て進めていけるのでしょうか。

菅野 先ほどの3つのミッションに
も直結しますが、まず再生可能エネ
ルギーの拡大は筆頭に挙げられます。
もともと当社は戦後復興期の電力需
要を賄うことを使命として、大規模
水力発電の開発から出発した歴史が
ありますし、風力発電も20年ほど前、
日本で最初に手掛けた企業の一つで



※ 本ロードマップは政策等条件、産業発展の進捗を前提条件として随時更新、詳細化します。また前提条件の変更に伴い、内容の見直しを図ります。
*1 2013年度実績比 *2 電力ネットワークの増強はJ-POWER送变电の取り組み
※ CO₂排出量削減目標の基準を2017～2019年度3カ年平均実績比から2013年度実績比に変更、2017～2019年度3カ年平均実績比では2025年度目標：-700万t、2030年目標：-44%/-2,030万t

す。現在も水力と風力はともに設備出力規模で国内シェア2位を占めていますので、これを土台に地熱発電や太陽光発電も広げつつ、海外も含めて拡大策を推進中です。

これから特に力を入れたいのは洋上風力です。日本ではすでに陸上風力の適地が少なくなったこともあり、風況に恵まれた海洋国家ならではの強みに期待がかかります。Jパワーも北九州市沖で大規模洋上風力の建設を始めましたし、各地の海域では公募入札も進んでいます。英国では、日本にはまだないレベルの大規模洋上風力プロジェクトに建設段階から参画しています。

CO₂フリー発電を一刻も早く広めるために、青森県で建設中の大間原子力発電所の推進も課題です。現在は原子力規制委員会による適合性審査中であり、早期の許認可取得を目指します。

もう一つ、脱炭素化へのトランジションにとって重要な課題が、CO₂フリーな水素エネルギーの実用化です。これにはJパワーが石炭火力発電の高効率化を目的に20年以上かけて開発した、石炭ガス化の技術を活用します。通常は石炭の燃焼熱を利用してつくられた蒸気力で発電す

るところ、この方式では石炭をガス化して得られる水素主体のガスを発電などに使います。

この過程でCO₂を分離して、それを回収して地中などに封じ込めるか、別の用途に利用すれば、CO₂をまったく排出しない「ゼロエミッション」の水素発電が実現するという計画です。

すでにこの技術は実用段階にあり、

電力安定供給とカーボンニュートラル どちらも全力前進で。

長崎県の松島火力発電所にその設備を追加するための環境アセスメントに入りました。水素社会への第一歩となるこの取り組みは、起源を表す言葉を用いて「GENESIS松島計画」と呼んでいます。

このように、既存資産を活かして新たな役割を与える戦略を「アップサイクル（創造的価値変換）」と呼び、Jパワーはこれを一刻も早い目

標達成のための基本方針に据えています。

地域によって支えられる電力事業というビジネス

——「地域社会との共生」も重視されるとお聞きしました。

菅野 そうですね。電力事業というのは、地域の方々の理解と協力がなくては成り立ちません。ですから、

Jパワーは企業理念の中に「環境との調和をはかり、地域の信頼に生きる」を掲げ、創業当初より地域とのコミュニケーションや社会貢献活動に取り組んできました。

今、Jパワーの設備が所在する地域の多くが、高齢化や働き手不足といった悩みに直面しています。同じ場所で事業を営み、ともに生活する住民の一員として、その悩みを分か

愚直な使命感和くなくさチャレンジ

——これまでに担当されたお仕事でもしよかったご経験はありますか。

菅野 たくさんあります。2004年に民営化する前のことですが、大間原子力発電所の立地事務所で過ごした5年間は、地域の皆様との関係がどれだけ大切かを学ばせていただく貴重な経験となりました。民営化に当たってはグループ企業の再編という難題もありましたし、東日本大震災以降は、二十数年ぶりの大型地熱発電や、世界最高水準のクリーンコル発電など、エネルギーの新しい時代を予感させる開発業務に携わることができました。

でもやはり、一番思い出に残るのは失敗体験の数々でしょうか。いつもみんなに話しているのは化粧品事業の失策です。ある時、事業多角化の一環で、ダムに流れ着く流木から生成した木酢液に保湿効果が期待できるといので、これを使った化粧品を開発しました。製造認可を得て、別会社を興したまでにはいいものの、結果は不発に終わります。こんな商品も開発できるんだと、自分たちの技術力ばかりに目を奪われて、市場

ち合うことが大切です。Jパワーに何ができるかをこれまで以上に、自分事として考えなければいけないと思っています。

例えば、静岡県の佐久間発電所では現在、1956年の運転開始から70年近い年月を経てリパワリング（設備更新）の計画を進めています。水車発電機などの主要設備を刷新し、同じ水量でより多くの電力が得られるよう発電効率を高めることが目的ですが、単に性能を上げるだけでは事業としての持続可能性は得られないと考えています。地域や流域との共生、環境との調和を求める姿勢がなければ、そこで暮らす人々の共感を得ることはできないからです。

そこで佐久間発電所では、ダムのある天竜川で漁業を営む方々と共同で、鮎の放流や生態調査などを通じて、豊かな川の資源を守ることに努めています。このようにして「NEXUS佐久間」と命名されたこの計画の実現を目指します。

社会全体に対してはインフラ資産をきちんと次代へと引き継ぐ役割を、地域社会に対しては発電所がそこにあることのメリットをもたらし役目を、しっかりと果たしていきたいと思っています。

のニーズというものをきちんと見極めていなかった。それが敗因です。大いに勉強になりました。

広島では高級牡蠣の養殖にもチャレンジして惨敗しています。これも地域共生に向けた協力のつもりだったのですが、地元の伝統的な養殖法への理解が足らずに受け入れられませんでした。儲かればいいわけではない。今思えば未熟でしたね。

ただ、仕事を任せてもらったこと、場数を踏んで成長できたことはありがたい経験です。今の社員の皆さんにも、任されて挑戦して学び取れる職場であればと願っています。

その意味では、今進めているスタートアップ企業との協業もおもしろい。上下水道がない場所で役立つ簡易水道システムや、洋上風力の電気を蓄電池に貯めて船で運ぶ構想など、新しい挑戦の輪が広がっています。

——最後に、Jパワーをどんな会社にしていきたいですか。

菅野 大それた野望はありません。ただ初心に立ち返り、いつでも地域とともにあり、環境との調和を大切に、安定的に絶え間なく、エネルギーを提供する会社であり続けたい。それがJパワーの使命です。

取材文／松岡（一郎）(エスクリプト) 写真／竹見 脩吾

GLOBAL
EDGE

就任のごあいさつ 02

社会とともに生きる企業J-POWERが忘れないビジョンと使命 04

特集 異なる立場を思う

Global Vision ブルース・ミラー AO × 渡部 肇史
立場の違いを受け入れて互いの共通点に目を向けよ 10

Opinion File 山本 遼
誰もが心地よく暮らせる「知縁」でつながる街 18

Global Headline 寺島 実郎
コンピューターは荒野をめざさない 09

Home of J-POWER 藤岡 陽子
先人の知恵が生きる風光明媚な城下町
～愛媛県宇和島市・愛南町と南愛媛風力発電所を訪ねて～ 22

Global J-POWER 世界とともに タイ王国 Vol.2
屋上の太陽光発電でCO₂削減と電力安定供給に寄与 30

POWER PEOPLE
J-POWER 茅ヶ崎研究所 32

Venus Talk 刺繍家 千葉 美波子 34

匠の新世紀 有限会社桶栄川又 35

Power of Words 私の好きな言葉
歌人 岡本 真帆 39

「音のソノリティ」を詠む 歌人 小島 なお
チャンココ 40

J-POWER NEWS 41

愛媛県の南西端に位置する高茂岬。80～100m級の断崖絶壁が連なっている（愛媛県愛南町）。

表紙イラスト：鯉江 光二
本文デザイン：田村 嘉章、中川 まり、渡辺 美岐
制作協力：Weber Shandwick（ウェバー・シャンドウィック）



ChatGPTをはじめとする生成AI（テキストや画像、音楽などのコンテンツをつくる人工知能）に注目が集まっている。ChatGPTは、「大規模言語処理深層学習モデル（Large Language Models）」とく、大量のテキストデータを使って学習された自然言語処理技術を用いており、入力された文脈に基づき、確率的に合理性の高い言葉を予測して文章を生成する。

生成AIは、能力の拡張という意味で人間にとって光明であることは確かだが、同時に影の部分もあることを理解しておく必要がある。

実際にChatGPTを使ってみて気づくのはまず、生成されたテキストが必ずしも正確とは限らないこと。2つ目には、どのようなデータが読み込まれたのかがわからず、結果責任が不明だ。

これから情報量が拡大していくので、機能が向上していくことは間違いないが、現状では、明らかに情報量に限界があり、技術的自律性もないということがわかる。したがって、生成AIを有効に活用するためには、質問者に課題設定力が求められる。どのような意図、立場、条件で、どのような回答をめざして質問しているのかを明確にすることが必要だ。

重要なのは、「認識と意識」を理解して使うことだ。将棋の最善手を見つけないような「目的手段合理性」、すなわち「認識」のために生成AIを稼働させるな

らば、情報量がどんどん増えれば増えるだけ正確さは増し、人類にとって役に立つものになるだろう。

だが、人間は認識だけで行動する生物ではない。人間が人間らしく生きるためには「意識」の力が重要なのだ。意識の中でも、目・耳・鼻・舌・身といった身体的意識については今後、AIが感知能力を高めていく可能性は多いにある。だが、最も人間らしいといえる美意識や愛、友情、理念、条理、宗教といった「価値意識」は、AIも最後まで獲得することはできないと思われる。

例えば、人間は友情のためには損をするとわかっていることでもやってしまうことがある。AIは合理的判断をするためのツールだから、損をすることは絶対にしない。だが、不合理であることがわかっていても自分の「価値意識」に沿った行動を取るかもしれないところにこそ人間のポテンシャルがある。

五木寛之氏の『青年は荒野をめざす』という小説がある。だが、コンピューターは荒野をめざさない。なぜなら、リスクがあつて、何の得にもならないかもしれないことは止めた方がいいというのがAIというシステムだからだ。今後我々は、AIを活用しながらも、創造力や企画力といった「価値意識」を活用した能力を研ぎ澄ませていく必要がある。

Global Headline

コンピューターは
荒野をめざさない

寺島 実郎

てらしま・じつろう

一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長。1947年、北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了、三井物産株式会社入社。調査部、業務部を経て、ブルッキングス研究所（在ワシントンDC）に出向。その後、米国三井物産ワシントン事務所所長、三井物産戦略研究所所長、三井物産常務執行役員を歴任。主な著書に『ダビデの星を見つめて 体験的ユダヤ・ネットワーク論』（2022年、NHK出版）、『人間と宗教あるいは日本人の心の基軸』（2021年、岩波書店）、『日本再生の基軸 平成の晩鐘と令和の本質的課題』（2020年、岩波書店）など多数。メディア出演も多数。



TOKYO MXテレビ（地上波9ch）で毎月第3日曜日11：00～11：55に『寺島実郎の世界を知る力』、毎月第4日曜日11：00～11：55に『寺島実郎の世界を知る力ー対談篇 時代との対話』を放送中です。（見逃し配信をご覧になりたい場合は、左記QRコードにアクセスしてください）



立場の違いを受け入れて 互いの共通点に目を向けよ

J-POWER会長

元駐日オーストラリア大使、豪日交流基金理事長

渡部 肇史 × ブルース・ミラー AO

南半球にある大きな大陸からやって来た知日家の元外交官は、その実、数々の困難を潜り抜けて得た大局観と、細やかな目配りとを併せ持つ方である。「何十年もかけて築いた信頼関係も、壊れるのは一瞬」との至言が、胸を突いた。

日豪間のかけ橋に徹した 45年来の「巡り合わせ」

渡部 本日は、日豪交流のキーパーソンとして長く活躍してこられたブルース・ミラーさんに、互いの立場や価値観などの違いを超えて、上手につながり合うことに関してお尋ねしたいと思います。その本題に入る前に、ミラーさんの来歴として40年以上にも及ぶ日本とのつながりをご紹介くださいますか。

ミラー 正確を期せば45年の付き合いになります。高校時代に初めて日本を訪れて以来、日本の文化や社会との出会いには、数え切れないほど多くの「巡り合わせ」を感じています。

渡部 その初来日を皮切りに、大学時代には日本に1年間留学もされ、オーストラリア政府に就職後は駐日大使館の政務担当公使などを歴任、駐日大使も務められました。

ミラー この間のトピックがあまりにも多過ぎるので、忘れないうちに最初の質問への答えを述べさせてください。

国と国がつながるには、言葉や文化、政治、経済など広範な領域にわたって密に交流し、相互理解を深め

の親近感が育まれたと……。

ミラー たった2分間の父との会話が、私の人生を一変させました。それもおもしろそうだと思っていた17歳の私に、国際交流基金の研修プログラムというチャンスが訪れ、日本語を勉強する決心がついたのです。

渡部 その後に留学生、さらに外交官として日本とのつながりを深めていった中で、ご自身が日豪両国のかげ橋になると強く自覚されたのは、どのタイミングでしたか。

ミラー 様々な機会がありました。一番印象深いのは駐日大使として赴任し、天皇（現上皇）陛下に信任状を捧呈する儀式に臨んだ時です。皇居の宮殿「松の間」で今と同じエピソードを私が披露したら、陛下は「お父上には先見の明がありましたね」とおっしゃって、その言葉が心の奥底に響いたのをよく覚えています。

東日本大震災後に着任 非常事態にもルールを重視

渡部 駐日大使としての着任は東日本大震災後で、知日家のミラーさんといえども、大使館の仕事を切り盛りするのに困難を強いられたのではないかと思います。

ミラー 私の着任は2011年8月

祖父たちの語り聞かせと たった2分間の父との会話が、 私の人生を一変させました。

ることが何より大事です。それが十分でない、往々にして互いの立場の違いや利益相反などを声高に主張し合ってしまう。相違点を盾にいつてもいがみ合う前に、ものの見方や価値観の共通点にまず注目してほしいと思います。

渡部 なるほど。実は私も、Jパワーに入社してから2度ほど海外赴任を経験しましたが、行つてしばらくは

で、大震災の起こった3月から5か月ほど経っていました。東日本大震災直後からオーストラリアは東北地方の被災地での救援活動に取りかかり、オーストラリアのギラード首相は当時世界の指導者の誰よりも早く日本を訪れました。当然、大使館のスタッフもてんでこ舞いの日々で、実は、その彼ら自身も巨大災害を目の当たりにして大きなトラウマを抱

留学生や外交官として日本と 深くつながる中で、両国のかけ橋に なると自覚されたのですね。

えていました。ですから私の最初の任務は、日本の方たちと同じように激しく動揺する大使館スタッフに心身のケアを施すなどして、大使館の業務や機能を平常通りに戻すことだったのです。

渡部 国と国の垣根を越えて人や物資を動かすとなると、やはり国際的ルールや事前の取り決めに則った手続きや、細部に至る調整が必要にな

言葉や習慣の違いに戸惑うばかりでした。でも、その国のしきたりや社会の成り立ちに身体ごと馴染んでいくと、この点は日本と変わらないとか、根っこは同じだと分かってきた気がします。

ミラー それこそが相互理解の出発点です。もう結論をテーブルに載せたので、安心して話を先へ進めましょう（笑）。私が日本という国に興味を

抱いたきっかけは、祖父とその妹たちが1930年代に訪日した折のエピソードを、幼い私によく語って聞かせてくれたことです。その原体験があつて私が11歳になった時、今度は父が、外国語を学ぶならヨーロッパの言語ではなく、先々を見据えてアジアの言語にしてはどうかと助言をくれました。

渡部 その2つが重なって、日本へ

るのでしょね。

ミラー 法治国家であれば規範やルールに従うのが前提になります。あの震災の折にこんな出来事があつたそうです。オーストラリア政府は、震災直後2日と待たずに救援物資や捜索活動のために空軍の輸送機3機の派遣を決定しました。ところが日豪間には、日米間にあるような軍事面での地位協定がなかったので着陸



Global
Vision
Bruce Miller AO ×
Watanabe Toshifumi



ブルース・ミラー AO (Bruce Miller AO)
1961年生まれ。17歳の時日本の国際交流基金による研修プログラムで初来日。シドニー大学に進学後の1982年、日本の関西学院大学に1年間留学。1986年、外務貿易省に入省。首相内閣省、在日オーストラリア大使館政務担当公使など要職を歴任し、2011～17年駐日オーストラリア大使を務める。2017年、国家情報評価庁長官を務める。2018年、第一生命ホールディングス顧問、同社のオーストラリア子会社であるTAL Dai-ichi Lifeの社外取締役役に就任。同年、オーストラリア国立大学上級政策フェローに任命、オーストラリア勲章受章。2020年、豪日交流基金理事長に就任。同年、秋の外国人叙勲として旭日重光章を授与される。

許可が得られないと……。

渡部 受け入れ側の日本も混乱の極致で、せっかくの救援の申し出に即応できなかったのかもしれないね。

ミラー たえ非常時でも日本のルールを満たす対応を——と駐日大使館を挙げて各方面と協議を重ね、ようやく法的な根拠を探し当てたのです。結局、それで空軍機の派遣が1日遅れましたが、そうした互いのギャップを埋め合わせるための惜しみない労力が、最後にものを言うこととがしばしばあるわけです。

渡部 そういう局面でこそ、国同士の折衝にあたる誰かが一歩踏み出すなり、法の枠組みを超えて決裁することがあってもいいような気がします。日本の国や人々と日々接する中で、意思決定に時間を取られ過ぎると感じたり、手続きの煩雑さに戸惑ったりすることはありませんか。

ミラー お付き合いが長くなるにつれて大概のことは理解できるようになりました。良く言えば法治国家そのものであり、悪く言えば官僚主義的に過ぎると感じないわけではありませんが、昨今ではむしろ、日本側の都合をどうやって説明し、本国側に納得してもらうかのプロセスがより重みを増しています。互いの立場

違いを心得ながら共通点を見出すための行動原理はあるのでしょうか。

ミラー 私がオーストラリアの外務貿易省に入って最初の任地が、イラン・イラク戦争がまだ終結していない頃の駐イラン大使館です。現地へ赴いてからペルシャ語を覚える大変さは日本語の比ではありませんでしたし、とにかく困難と身の危険にさらされる勤務を重ねる中で、どんな交渉事もこちらの都合だけでは進まず、相手方にも都合があるのだと身に染みて学びました。

渡部 私の少ない経験でも、母国語以外の言葉を習得することの利点の一つに、その言葉を操る人たちのロジックの違いとか、発想や考え方の違いが分かってくるということがありそうですね。

ミラー まさにそれが異文化に触れることの効果・効能であって、同じ交渉のテーブルに着いている人間同士でも、自分の慣れ親しんだ言語・文化・価値観に基づいた着眼点と、相手方の言語・文化・価値観に基づく着眼点とは、まるで別物であるという認識からスタートするべきなのです。言い換えると、自国と相手国の立場を違えてしまう理由の第一は、各々の着眼点異なるからだとい

の違いを埋め合わせ、上手に懸案事項を解決に導いていくことが、大使館や私のような立場の者の役目であって、それでこそ国と国をつなぐ、真のかけ橋たり得るのだと思います。

両国間での契約の遵守と草の根の交流が友好の礎に

渡部 ミラーさんは外交官として日本以外の国へ赴任した経験もをお持ちです。ものの見方や価値観が驚くほど異なる国もあったと思いますが、

同じ交渉のテーブルに着いた人間同士でも、着眼点はまるで違うのだと知るべきです。

Global
Vision
Bruce Miller AO ×
Watanabe Toshifumi



立場の違いをよく認識して互いの共通点に注目することが相互理解の第一歩になると。

分かったことが、私が約40年の外交官人生から得た一番の収穫ではないかと思っています。

渡部 まずは、互いの立場の違いをよく認識すること。そして、その違いを踏まえた上で互いの共通点に注目することが大事と、冒頭でミラーさんはおっしゃいました。例えば、日豪交流を将来にわたって継続・発展させる上で、日本とオーストラリアの人々が知っておくべき両国の共通点といえば、どんなことが挙げら

カーボンニュートラルへ日豪連携で挑むJパワー

Jパワーにとってオーストラリアは1980年代、日本初の海外炭を用いた火力発電所の運転開始時から、燃料炭の調達先として欠かせぬパートナーである。以降、炭鉱開発、研究開発や技術支援など多岐にわたって業務提携を結ぶなど一貫して協力関係を深めてきた。

そして今、時代の要請であるカーボンニュートラル実現のため、褐炭から水素を製造するプロジェクトに積極的に参画。低炭素化のための最先端技術の社会実装や、水素社会への道を拓く水素製造やサプライチェーン構築に向けた実証試験などを多面的に展開している。また、オーストラリアでの再生可能エネルギー開発・運営にも関与している。



オーストラリア国クイーンズランド州にあるキッドストン揚水発電所（k2-Hydro）の建設予定地。

写真提供：GENEX POWER LIMITED 社

れるでしょうか。

ミラー 端的には両国ともに法治国家であり、民主主義国であり、憲法を遵守する国である点が共通していて、世界秩序に対して同じような見解を持つが故に、おのずと国益が一致する分野も多くなるわけです。であればこそ政治、経済、貿易、軍縮などの各分野で協力・協調関係を築いてこられましたし、民間ベースの交流や人々の往来を含めて友好関係を発展させて続けています。これも言い方を変えと、両国間で結んだ契約の遵守を重んじ、それを土台にして信頼関係を揺るぎないものにしたことが一つ。もう一つは、草の根の交流が盛んになって両国関係を盤石にした点も見逃せません。

渡部 そもそも日本人はオーストラリアが好きで、雄大な自然や伸びやかな風土など、日本にはないものに惹かれるのだと思います。

ミラー それはオーストラリア人も同じで、例えば北海道スキーツアーが憧れの的であるのがその証左です。そして私がいつも不思議に思うのは、日本人もオーストラリア人も自国に対してあまり自信がない点も共通していて、GDPが世界3位の国なのに「島国根性」を自認する日本人が

「信頼関係を築くには何十年もかかり、壊すのは瞬時という認識が大事です。」

少なくない一方で、オーストラリア人の多くは人口の少なさから「小さい国」と認識している節があります。**渡部** あれほど広大な国土を有しながら、小さい国と……にわかには信じ難い思いです。

ミラー 人口の9割までが総面積の1割に住んでいるという実態も背景にはあると思います。GDPが世界12位の国にしては、国際社会への影響力を自ら過小評価しがちです。ただし自国を過信しないからか「謙譲の精神」を持ち合わせているのも、日豪の両国民に相通ずる感覚と言えるかもしれません。

再エネ移行にも活かせる
日豪パートナーシップ

渡部 もう一つの視点として、Jパワーが属するエネルギー産業界においても、日豪両国はこの上なく密接で良好な関係を保っています。日本の一次エネルギーの3割がオーストラリアを供給源としており、小資源

国の宿命ともいえる「電源のベストミックス」を構築する上で、また我々に課された使命である電力安定供給を達成する上でも、両国のパートナーシップをこれまで以上に発展させていかなければなりません。

ミラー 同感です。単なるビジネス交流の域にとどめず、日豪は互いに資源調達に関して地政学上、常に戦略的に考えて歩調を合わせていく必要があります。なぜなら政治的、経済的に安定しているオーストラリアを資源の調達先とするのは日本にとって得策ですし、かたやオーストラリアにとっても、日本からの投資がなければ鉄鉱石も、石炭も、天然ガスも十分には開発できなかったことを記憶に留めるべきでしょう。

電力安定供給を達成するためにも
日豪パートナーシップが不可欠です。

渡部 今日、世界的潮流として化石燃料から再生可能エネルギーへのシフトが進む中でも、実は日豪のパートナーシップには大きな可能性とポテンシャルが内在していると感じています。特に、双方が国家目標に掲げている「カーボンニュートラルの実現」へ向けて、すでに両国間で官民挙げての共同開発プロジェクトが多数立ち上げられており、そのうちのいくつかはJパワーも積極的に参画するなど、ますます日豪交流を深めようと動き始めています。

ミラー その点については、両国間でどういう分野で協力するべきかを考え、協議する段階から私も興味深く見守っているつもりです。エネルギー分野で有望な取り組みの一つが、

CO₂の回収・貯留を行う「CCS（CO₂回収・貯留）」であり、さらに有効利用まで可能にする「CCUS（CO₂回収・有効利用・貯留）」などの技術開発をスピードアップして、いち早く社会実装の段階へ進むことを望んでいます。

渡部 カーボンニュートラル実現の切り札と期待されている「水素エネルギー」も、日豪双方の持ち味を活かして取り組む価値がある分野ですし、現に「褐炭水素プロジェクト」のような形でアウトラインが定まりつつある案件もありますね。

ミラー そうした有意義なパートナーシップから着実に成果を上げるには、なんといつても両国間に揺るぎない信頼関係を築くことが欠かせません。いくら技術や資本を持ち合わせていても、信用ならない相手国と手を組むのはリスクが大き過ぎる。そして信頼関係というのは、築くのに何十年もかかるのに、壊すのはあっという間です。政治家だけで

なく官僚にも、企業にも、その認識を持つことが必須であると、私は声を大にして言っておきたいですね。**渡部** ありがとうございます。最後に1点だけ、この国と長く関わってきた間に「日本人は変わった」と思われる点がありますか。

ミラー そうですね……転職する人が増えたとか、家族観が変わったのではと感じたりもしますが、何かが革命的に変わるのではなく、年月の経過とともに一歩ずつ変わっていくのが、すなわち日本流なのだろうと。**渡部** では逆に、変わらないと思われるところは？

ミラー 今のご質問のそのままだに、自分が外目にどう見えているか気になって仕方がないところ。でも安心してください。本当はオーストラリア人も似たようなもので、外目を気にしすぎる国民ですから（笑）。

（2023年5月12日実施）

Global
Vision

Bruce Miller AO ×
Watanabe Toshifumi



誰もが心地よく暮らせる「知縁」でつながる街



山本 遼
株式会社R65
代表取締役

65歳以上に特化した 不動産会社を立ち上げ

その女性が店舗に現れたのは、山本遼さんが愛媛県の不動産会社に就職して2年目、東京に転動になってからすぐのことだった。80代でありながら矍鑠とした様子の女性は、すでに4軒の不動産会社に門前払いされたという。多くの不動産会社は高齢者と賃貸借契約をしたがらない。断るのが業界の常識だったが、「客としてまったく相手にしてもらえなかった」という女性の話を聞いて、心が動いた。このまま帰すわけにはいかない。しかし、紹介できる物件を求めて各所に電話をかけるも、200件の問い合わせに対して借りられる物件はわずか5件しか見つからなかった。

「こんなに断られるものと、頭をがっつんと殴られたような気持ちになりました」

保険と見守りサービスで 賃貸借契約のリスクを軽減

事業を立ち上げた当初は問い合わせがほとんどなく、「半年ほどぶらぶらしていた」という山本さん。その間、様々な人に会ってアドバイスをもらった。とある先輩からの指南で介護施設を回り始め、都内の施設を100カ所訪ねたこともある。95カ所は空振りだったが、5カ所だけ、毎月1人くらい部屋を探している人がいるが、なかなか見つからずに困っているという施設があった。こうした地道な活動から徐々に問い合わせが増えていき、

これまで高齢者に対して自分も当たり前のように断ってきたが、本当にそれでよかったのか、山本さんが思い直すきっかけとなったできごとだった。

「無事にお部屋が見つかり、お引越しの際にアパートまで鍵を持って行きましたが、その女性がタクシーから大きなテレビを持って降りてこられたんです。『引越しの間は暇だからテレビでも見ようと思ってるの』とおっしゃるのでびっくりして。息子さんのお店を手伝っていると聞きましたが、とにかくお元気でパワフル。収入があつて、健康で、家族も近くにいます。年齢を除けば、私たちと何ら変わりがない。だからこそ、この現状に大きな疑問を感じたのです」

その後、高齢者への賃貸仲介事業を進めることができないか、役員会で提案の機会を得た山本さん。熱を込めてプレゼンするも、役員たちの反応は鈍かった。

この事業に関心を寄せてくれる人の輪も広がって、R65不動産の認知度は少しずつ上がっていった。

しかし、高齢者でも借りられる物件を探すことは、想定通り、苦難の連続だったそうだ。そもそも、なぜ高齢者に賃貸住宅を貸したくないのか。そこには大きく3つの問題がある。

1つ目は孤独死※2。事故物件になると、次の借り手が見つかりにくくなるといったリスクを伴う。2つ目は入居中のトラブルで、認知症を発症してご近所に迷惑をかける可能性や、家賃を払い続けられるのかといった不安が拭えない。3つ目は、高齢者には貸した

ことがない、だから断るのが常識という業界全体の不文律のようなものが存在していることだ。R65不動産は、不動産仲介に付随する事業を広げることで、こうした課題に対応するための方策を模索してきた。

「孤独死の問題に対処するため、電力会社と協力して、電気のメーターを利用した見守りサービス※3を実施しています。30分ごとに電気の使用量を測定し、その数力

月分の記録から普段と異なる電気の使用量を検知したら通知するというシステムです。このサービスであれば、設備投資費用が抑えられ、監視カメラなどと違ってプライバシーの問題もクリアできます。また、万が一、お部屋で亡くなった場合も、原状回復の費用などを保証する保険を整備しています。見守りと保険をセットにしたサービスを提供することにより、大家さんの不安を解消し、高齢者はより多くの物件にアプローチすることができるようになりました」

さらに、もっと多くの物件情報を届けたい



高齢者というだけで難色を示す不動産会社はまだ多い。

※3 電気による見守り

入居者のプライバシーを侵害しないように、AIが電気の使用量に基づき見守るサービス。

※2 孤独死

誰にも看取られることなく、1人で亡くなること。地域社会とのつながりの希薄化や経済的困窮などが原因として挙げられる。その数は年々増加し、社会問題となっている。

※1 高齢者

日本の65歳以上の高齢者の数は3627万人、総人口の29.1%を占める（2022年9月15日現在：総務省統計局）。



「FIRE（経済的自立と早期リタイア）した後にやりたいと思うことを、今チャレンジしたい」と話す山本さん。

自分が立てるステージを探している人は案外多いんじゃないかと思っています。5%の労力で80点くらいのをみんなで作る、そんな考え方で進めていけば、たくさんの方がステージに立つ機会を得られるかもしれません」

共同書店に70代の女性が来た時のこと。本を購入するわけでもなかったが、1時間ほど

自分が立てるステージを探している人は案外多いんじゃないかと思っています。5%の労力で80点くらいのをみんなで作る、そんな考え方で進めていけば、たくさんの方がステージに立つ機会を得られるかもしれません」

話をして、「3年ぶりに人と雑談をしました。こんなにしゃべったのは、本当に久しぶり」と笑顔を見せて帰ったという。中には、本に詳しいお客さんが、店員に対して本に関する熱弁を振るうこともある。ここは、お客さんにとってもまた、ステージが与えられる場所なのかもしれない。

山本さんは現在、自らが運営するシェアハ

ウスで暮らしている。15軒のシェアハウスは、クリエイターが集まるシェアハウス、国際協力の仕事に携わる人が暮らすシェアハウスなど異なるコンセプトをもち、個性豊かな住環境を展開している。

「私は就職後に上京したので、東京に友だちがほとんどいませんでした。唯一、東京にいた友だちがシェアハウスに住んでいて、遊びに行ったら、住人同士の利害のない関係性がとても心地よく感じました。そこからシェアハウスの運営を始め、住民としても関わるようになりましたが、今、自分の家がすごく楽しいんです。こうした人とのつながりによって成り立つ『小さな街』を、シェアハウスを拠点につくれないだろうか。最近はそのことを考えています」

取材／文／脇ゆかり（エスクリプト）
写真／竹見脩吾（P・19、P・20の写真はご本人提供）

やまもとりよう

株式会社R65代表取締役。1990年、広島県生まれ。2012年、愛媛大学工学部を卒業後、愛媛県内の不動産会社に就職。2016年にR65不動産を法人化（株式会社R65）。65歳以上を対象とした賃貸住宅を取り扱って話題となる。「高齢者賃貸」に関する講演のほか、「ガイアの夜明け」をはじめ多数のメディアに出演。現在はシェアハウス15棟に加え、棚貸しの共同書店を運営。高齢者の住まい探しや街づくりについて発信を続けている。



共同書店には現在40人の棚主がいる。それぞれの個性が映し出された本棚を見るだけでも楽しい。



北千住にオープンした共同書店「編境」。人と人との境界を編む場所にしたい、との思いが込められている。

という思いから、R65不動産のビジネスモデルを全国規模で展開する「パートナー不動産」を募集。現在、40社の不動産会社がパートナーとしてR65不動産のポータルサイトに物件情報を掲載している。高齢者の豊かな暮らしを

実現したいという思いが全国で芽吹きつつあるのだ。でも、「まだ40社だけ」なのだと山本さんは言う。

「現在、不動産会社は13万社ほどあります。これはコンビニエンスストアよりもずっと多い数。それなのに、まだ40社しかパートナーさんがいないというのは、憂うべき状況だと考えています」

山本さんによれば、高齢者のうち6人に1人が賃貸住宅を借りている。その数約400万世帯。ちなみに大学生の総数は約270万人で、そのうち賃貸住宅を借りているのは6〜7割、200万人にも満たない。高齢者のマーケットがいかに大きいかわかる。しかし、同時に、最も難しいマーケットであるともいえる。

「高齢者には賃貸住宅を貸さないという風潮は根強いものがあります。中には、大家さんがOKを出しているのに、管理会社や不動産会社が入居を拒むケースもある。この事業で一番難しいと思うのは、人の意識を変えることだと感じます。でも、ここをクリアできれば、例えば外国人の方、身体に障がいがある方、LGBTQ（※4）の方など、高齢者ほど困難ではないけれど、やはり賃貸住宅を探す際に困っている多くの方々の突破口になるかもしれない。そんな期待を抱いているんです」

貸主や不動産会社の担当者には、部屋の内見に立ち会ってもらったり、店舗に来てもらっ



北千住のシェアハウス「アサヒ荘」にはクリエイターが多く暮らしている。毎月、住人たちが企画するイベントで盛り上がる。

シェアハウスを拠点に 人と人がつながる街を

山本さんの挑戦は、不動産業にとどまらない。現在、15棟のシェアハウス（※5）に加えて、北千住（東京・足立区）で棚貸しの共同書店を運営。以前は、東京・世田谷区の松陰神社付近で日替わり店長が切り盛りするスナックも開いていたそう。

「共同書店もスナックも、一人ではできないけれど、誰かとシェアすることで可能になる。

たりすることもある。高齢者と一括りにするのはなく、実際に会うことで、心理的なハードルを取り除く一助になると考えているからだ。

※5 シェアハウス

1つの住居を複数人でシェアして暮らす賃貸住宅。キッチンやリビング、バスルームなどを共有することが多い。山本さんが運営するシェアハウスのようにコンセプトが明確なタイプも増えている。

※4 LGBTQ

レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クィアまたはクエスチョニング（＝性的指向・性自認が定まらない人）の頭文字をつなげた略語で、性的マイノリティを総称する。

愛媛県

宇和島市

南愛媛風力発電所

愛南町

先人の知恵が生きる 風光明媚な城下町

～愛媛県宇和島市・愛南町と南愛媛風力発電所を訪ねて～

宇和島城は藤堂高虎によって築城され、宇和島藩2代藩主・伊達宗利が現在の層塔型の天守に改修。現存天守12城のひとつである。

Jパワー南愛媛風力発電所は、愛媛県南西部の宇和島市にある。この地域は南予と呼ばれ、江戸時代には宇和島藩が領地を治めていた。漁業や果樹農業が盛んな城下町を、のんびりと歩く旅に出た。

作家 藤岡 陽子／写真家 竹本 りか

白くそびえ立つ宇和島城
天守から城下町を眺める

標高約73mの丘陵に築かれた宇和島城を目指して、城山の登山口に立った。すると天守に至る道は2通りあり、一つは急こう配の苔むした石段で、もう一つは緩やかな山道だった。

最短距離なら、石段だな……。終点が見えない長い石段を見上げ、ここは迷わず山道を選ぶ。

約400種類もの草木が生い茂るといわれる城山はひんやりと涼しく、心地のよい空間だった。クスノキなどの巨木が多く見られるのには理由があり、この城山はおよそ300年間火災がなく、伐採からも守られてきたという。

山道を登りきると視界が一気に開け、天守に続く石段が現れた。ここには太陽を遮る樹木が少なく、

石段を一步一步、額に汗をにじませ上っていく。

最後の一段を踏みしめた先には宇和島城の天守が、白く眩しくそびえ立っていた。

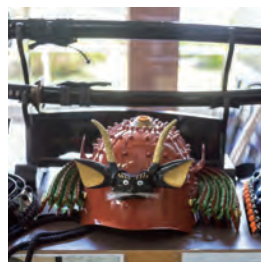
宇和島伊達家の成り立ち
和霊神社に祀られた御霊

宇和島市内を散策していると、宇和島伊達家に縁ある歴史的建造物にしばしば出会った。そもそもなぜ東北の大名である伊達家が、宇和島と縁を持っているのか。

そこには興味深い歴史がある。宇和島伊達家の藩祖である伊達秀宗は、伊達政宗の長男として誕生し、将来は仙台藩主となるべく大切に育てられたという。だが4歳の時に政治的意向で豊臣秀吉の元へ差し出され、秀吉没後は12歳で徳川家の人質になる。

秀宗は時代の潮流に乗せられ10代を過ごしたが、過酷な運命はこれに終わらず、21歳の時には仙台伊達家の後継の座を、弟である伊達忠宗に奪われてしまう。

その4年後、還る場所を失った秀宗は、政宗の計らいで徳川家から10万石を与えられ、宇和島藩主



藤岡 陽子 ふじおか ようこ
報知新聞社にスポーツ記者として勤務した後、タンザニアに留学。帰国後、看護師資格を取得。2009年、『いつまでも白い羽根』で作家に。最新刊は『リラの花咲くけものみち』。その他の著書に『満天のゴール』『おしよりん』など。京都在住。

写真
竹本 りか たけもと りか
風景写真家。千葉県生まれ。2007年、写真家・高橋よし子氏に師事し、その後独立。日本各地の風景を撮影し、その作品は多くの書籍、雑誌、旅行パンフレット、カレンダーなどに採用されている。
<https://takemotoriga.com>



遊子水荷浦の段畑。山の傾斜に2mほどの石垣を積み上げ畑地になっている。



宗紀が書屋として使っていた天赦園内の春雨亭



秀宗の家老・山家清兵衛が祀られる和霊神社。7月下旬に和霊大祭が、うわじま牛鬼まつりと同時開催される。

となった。

和霊町に秀宗の家臣であった山家清兵衛を祀る和霊神社があると聞き、訪ねて行った。

清兵衛は、元は政宗の家臣であり、秀宗が宇和島に入った当初から仕えた功臣であった。だが秀宗は監視役としての清兵衛を疎ましく思い、上意討ちにしたと伝えられている。しかしその後、秀宗の身辺で不幸が続き、清兵衛の魂を鎮めるために和霊神社が創建された。和霊神社の大鳥居は、石造りでは日本一の大きさを誇り、掃き清められた境内には清廉な空気が漂う。その明るさに今世では清兵衛がすべてを赦し、宇和島の地を見守っているのだと感じられた。

「天赦園」に込められた想い
懸命に生きた先の憩いの庭園
7代目藩主・伊達宗紀の隠居所としてつくられた名勝天赦園に、立ち寄ってみた。

天赦園という名称は、政宗が晩年に詠んだ漢詩にちなんだもので、「若い頃から戦いに明け暮れたが、世が平和になってみると白髪の老人である、老後は天も赦してくれらるだろうから楽しんで暮らそう」という内容から「天」と「赦」を用いたといわれている。

約3400坪の園内では花菖蒲が開花を迎え、艶やかな紫色の花を眺めながら、隠居生活を楽しむ宗紀の優雅な姿に思いを馳せた。

段畑つくった先人の知恵
伊達博物館で歴史を学ぶ

宇和島市の西側は宇和海に面しているが、東側はすぐ背後に鬼ヶ城連峰が連なり、海岸部からわずか5〜6kmで高度1000m級の山が迫っている。そのせいで畑地ができる平地が少なく、昔から急斜面に階段状の畑をつくるなどして作物を収穫してきた。その段畑はいまも残り、宇和海に面する遊子水荷浦の段畑は重要文化的景観に選ばれている。

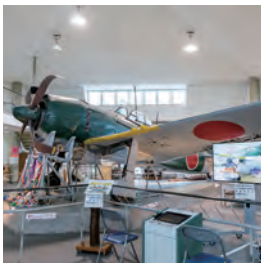
1 和霊神社の大鳥居。 2 南予に伝わる牛鬼。和霊神社では毎年7月23・24日には「和霊大祭」が斎行される。 3 伊達博物館に建てられた8代藩主、伊達宗城の銅像。 4 「天赦園」と刻まれた石碑。文字は宗紀自らが書き遺した。 5 清らかな滝や奇岩が幻想的な薬師谷溪台。 6 紫電改展示館に保存される戦闘機「紫電改」。 7 愛媛県最南端の高茂岬。晴天の日には九州が一望できる。 8 遊子水荷浦の段畑から宇和海を見下ろす。



8



7



6



5



4



3



2



1



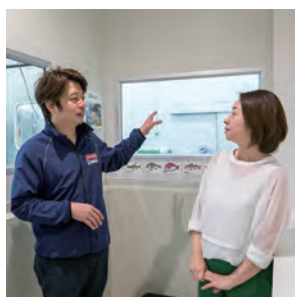
2



3



1



5



6



4

1 宇和島伊達家の家紋について説明する学芸員の伊藤絵理さん（右）。
2 9代藩主・伊達宗徳夫人、住姫の婚礼道具「花菱月丸扇紋」散蒔絵女乗物。ゴージャスな内装にも注目したい。
3 伏見城内の障壁画を屏風に改装した伏見御殿屏風。秀宗が豊臣の元で過ごした頃の暮らしぶりがかがえる。
4 安岡蒲鉾店のじゃこ天。魚の配合にこだわり、朝一番に仕入れた魚を原料にしている。
5 3代目の安岡弘和さん（左）。「あしが強い（弾力がよく、しなやかな）蒲鉾づくりを目指しています」。
6 手作業で魚をさばく従業員の方々。

「伊達秀宗が宇和島の藩主になったのは1614年ですが、初めてこの地に入った時は急峻な山々を見て驚いたかもしれませんね」
そう語るのは宇和島市立伊達博物館の学芸員、伊藤絵理さん。初代秀宗から現代まで13代続く伊達家の歴史を教えていただいた。
博物館では幸運にも秀宗の軌跡をたどる「苦勞兎秀宗」が開催されていて、館内には秀宗の産着や懐剣、豊臣秀吉からの賜り物などが数多く展示されていた。
「宇和島で伊達家のお殿様といえば、8代目の宗城公が有名です。ですが宇和島藩の基礎を築いた初代秀宗公のことも広く知っていただければと考えています」
こちらの博物館では宇和島市内の小中学校の子どもたちを対象に「出迎え事業」、「出前授業」、「夏休み子どもプロジェクト」などを開催し、地元の歴史を伝えている。
流転の海を越えて宇和島にたどり着いた秀宗は、68歳で没したとされる。だが伊藤さんたちの働きかけもあり、いまなお宇和島の藩祖として、地元の人たちの中で生き続けていた。



宇和海に沈んでいく夕陽。空気がオレンジ色に染まり、その美しさに目を奪われる。

原料は朝仕入れた生魚
骨も皮もすべて生かす

海の幸が有名な宇和島市だが、中でも「じゃこ天」は地元の名産品である。1952年（昭和27年）の創業以来、魚肉ねり製品を製造販売する安岡蒲鉾店を訪れ、工場を見学させていただいた。

「うちではその日の朝に仕入れた魚を手作業でさばき、じゃこ天やかまぼこをつくっています。生魚を一尾ずつさばく作業は手間がかかりますが、そうすることでほかにはない美味しさが出せるんです」

工場を案内してくださった安岡弘和さんは、安岡蒲鉾店の3代目。創業者の祖父の代から「とにかく美味しいものをつくる」という信念で伝統の味を守り続けている。

工場で製造されるのはじゃこ天、かまぼこ、ちくわ、つまれ等だが、原料になる魚の種類はそれぞれ違う。じゃこ天になる「ほたるじゃこ」は小骨が多いため、スーパージではほとんど見かけない魚らしい。「骨が多くて食べにくい魚も、宇和島では捨てないんですよ。こうやってさばいてすり身になると、骨

も皮も食べられます」

魚肉ねり製品を製造することは漁師の暮らしを守り、地域の活性化にも繋がると安岡さんは話す。

工場では魚をさばくところから石臼ですり身にし、成形、加熱、冷却の工程を見学した。すり身をつくるのに石臼を使うのは、冷たさを保つためだと教えていただく。

魚は朝一番にその日獲れ立てのものを仕入れるので、漁獲量によっては足りないこともあるという。その場合は他の魚を使うので味が必ずしも一定ではないが、それも味わいのひとつ。魚の配合はつくり手の力量に左右され、それが各店舗の特色、宇和島にしかない味にもなっている。

そういえば宇和島港は、秀宗が現在の樺崎に御台場を設置したのが始まりという記録が残っている。

運命に翻弄された秀宗は、絶望を胸に抱きこの地に入ったかもしれないが、でもそれはいつかのこと。後の人生は領地の発展に尽力したに違いない。そして先人たちが思い描いた豊かな未来は、町も海も山も美しい、いまの宇和島に繋がっていた。

南愛媛風力発電所
発電出力：28,500kW
運転開始：2015年3月
所在地：愛媛県宇和島市

タワーの下から約80m先のブレードを見上げる。

タワー内の様子。正面はエレベーターに続く梯子。

施設を案内してくださる城戸所長（左）と筆者。

観音岳の尾根沿いに立つ風車は全部で12基。山を駆け上がってくる風を受け、電気を起こす。

1 発電所の事務所の外観。2 事務所内にある制御室。3 事務所1階には点検などで使用する用具が整理整頓されている。4 事務所に隣接する変電所。風車から22kVで送られてくる電気を66kVに昇圧し送電線で送る。5 タワー内への出入り口。6 タワー内には計器類のほか、上部への梯子などが設置されている。7 タワーの先に設置されたナセル。8 落雷の有無を確認するための直撃雷検出装置。

「朝、おはよう」と顔を合わせ、夕方無事に帰ってもらうことが私の仕事です」
そんな言葉の裏に、自然を相手に働く緊張と慎重さを感じた。
発電所はさらにエリアを拡大し、新しい10基を建設中。運転開始予定は2025年なので、その頃にまた、南予の港町を訪れたい。

安全に、故障の有無を確認できる仕組みがあるのだと安心した。
愛媛は温暖な気候だというイメージがあるが、台風もくれば夏には大雨も降るといふ。発電所は高地に立っているため冬は雪も積もり、車での移動は細心の注意が必要になる。

城戸所長に「いちばん気をつけていることはなんですか？」と聞くと、即座に「作業員の安全です」と返ってきた。

「風車は月1回の月例巡視点検と、年に2回の定期点検をしています。それ以外にも例えば落雷があったと思われる時など、そのつと不具合がないか確認しています」
落雷、という言葉聞き、山中だとしばしば起こる天災だろうと心配になった。でも雷のたびに12基全部を点検していたら、どれだけの時間がかかるのだろう……。
「いえいえ、全部は点検しませんよ。風車の運転が止まった時点で連絡が入りますから、エラーが出た号機だけを確認するんです。それぞれの風車に直撃雷検出装置というものが設置しており、それを見れば落雷の有無がわかります」
城戸所長にタワーの根元についている装置を見せてもらい、納得する。風車にはこうして迅速に、

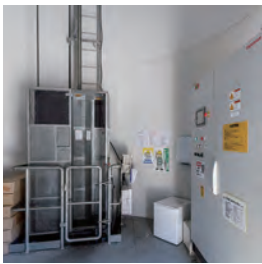
自然を把握し安全を守る
新エリアに新たな10基



8



7



6



5



4



3



2



1



1 工場の屋上に太陽光パネルを運ぶ様子。 2 太陽光パネル設置工事の作業前の安全ミーティング。 3 中川さんが担当するSPPの一つ、サラブリー県ノンケー工業団地にあるKP1サイト。 4 工場の屋上に設置された太陽光パネルで作業する様子。 5 太陽光発電のインバータールームで。直流を交流に変換し、工場内に配電する。左端が中川さん。 6 タイ北部への社員旅行でお坊さんへのお布施を行った。 7 ミーティングの様子。 8 中川さんの執務スペース。 9 スウェーデン出張時に見学したシーメンス社の水素発電設備。

これらの工業団地には日系企業の工場も多く稼働しており、これら日系企業に対しては中川さんが技術的な説明を担当している。日本では火力発電所の保守・管理を担当していたという中川さん。顧客と直接交渉するのは初めての経験だった。

「ちよつと緊張しましたが、我々が真摯に説明することで、話をよく理解してくださり、安心して任せていただけたと思います」

中川さんが担当するSPPが電力を供給している工業団地内の企業は50〜60社ほどあるため、まだまだ顧客が増える可能性が残されている。

妥協しない検査が信頼を生む

順調そうに見えるルーフトップソーラー事業だが、課題もある。

「タイ国でも太陽光発電がブームのため、経験のある工事作業員が取り合いの状態で、必要な人員の確保が難しくなっています。このため、試運転の際にしっかりとチェックして、期間内に修正作業を終わらせることが大切です。質の低下は火事や事故につながるため、不具合点を徹底的にあげ出し、妥協することなく修正するようにしています」

日本ではやったことがない業務にやりがいも感じているという中川さん。タイ国駐在も6年目になり、家族を呼び寄せて、海外生活も楽しめている。

「海外では自分が担当している業務の幅が広く、様々な業務に携われる機会があります。新しい技術にも取り組んで、タイ国の電力安定供給とCO₂削減に貢献していきたいと思っています」

屋上の太陽光発電でCO₂削減と電力安定供給に寄与 Kingdom of Thailand

ルーフトップソーラー事業 GJP1 ROOFTOP SOLAR



所在地：タイ王国
会社名：Gulf JP1 Company Limited
出資比率：J-POWER Holdings (Thailand) 60% 所有
発電方式：太陽光
設立：2021 年 8 月

工場の屋根を利用した太陽光発電

J-POWERは、タイ国で1960年代から40件以上のコンサルティング事業を行い、2000年代には、ローカルパートナーとともに現地法人J-POWER Holdings (Thailand) を通じ、発電所の開発・運営・保守に参画、3件のIPP（独立系発電事業者）と、10件のSPP（小規模発電事業者）に投資している。同社が現在取り組んでいるのがルーフトップソーラー事業だ。日本からの出向者で、現地でこの事業の新規開拓を担当する中川雄仁さん（かつひと）にお話を聞いた。

「ルーフトップソーラー事業は、子会社Gulf JP1社を通じてSPPが電力を供給している工業団地内で、工場の屋上などに太陽光パネルを設置し、発電した電力をその工場に供給するものです。顧客は初期投資なしで、通常よりも数十%安い価格で電力を購入でき、CO₂削減にも手軽に貢献できます」

顧客は、パネルやインバーター（直流を交流に変換）設備などの設置スペースを提供し、場合によっては屋根の強度を高める必要があるが、ほとんどリスクがない。現在、1件が稼働し、工事中や計画中含めると数十件ほどの案件が進行中だという。

中川さんは2018年から、タイ国にあるSPPの保守・管理を担当していた。SPPでは約80%は国営電力会社（EGAT）に売電するが、残りは工業団地内の工場に直接提供している。世界的に再生可能エネルギーを利用しようという機運が高まる中で、こうした顧客への販路を活かす形で、この事業が発案されたという。

「コンクリートの表面は平たんかつ綺麗に仕上げるのが常識ですが、ブロックの表面を工夫する（例えば凹凸）ことで、海藻の付着性が向上する可能性があり、常識にとらわれない考え方を持つように努力しています」

コンクリートの代替材としてJパワーが開発した「Jブルーコンクリート」は、火力発電所から出る石炭灰、銅の精錬過程で出る銅スラグを配

「カーボンニュートラルに貢献する コンクリート素材を究めたい。」

■ Jパワー 技術開発部 茅ヶ崎研究所 土木技術研究室 野崎 渉太

合することでブロック機能（重量）を高めつつ、生産時に大量のCO₂を発生するセメント使用量の削減により、素材由来のCO₂発生量を約3分の1に減らせる。

「現状は社内利用に留まっています
が、広く社会実装を図り、ブルーカーボンと低炭素素材の両面からカーボンニュートラルの実現に貢献したいです」

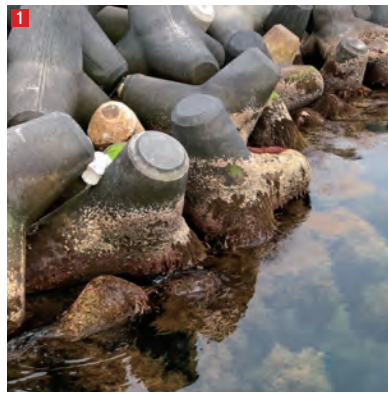
取材・文／内田 孝 写真／齋藤 泉

海沿いの護岸や磯場などで見かける消波ブロック。そこに繁茂する海藻類は生育過程でCO₂を吸収し、剥がれ落ちても分解されにくいことから、カーボンニュートラル実現へ向けた一つの手段として注目されている。

「海のゆりかごである藻場の創出は、海に囲まれた日本では重要なテーマ。海洋生態系に取り込まれた炭素（ブルーカーボン）は、CO₂吸収効率が

高く、長期間の貯留が可能です。海洋生態系の消失が進行しているため、その保全が重要です」

コンクリート素材の研究や品質管理を担う野崎渉太さんにとって、環境分野での貢献を求められる日々は新鮮さに満ちている。これまでに培った技術に新たな知見を加えて、教科書通りではないコンクリートの可能性に目覚め、興味が深まったそうだ。



1 低炭素素材「Jブルーコンクリート」でつくった消波ブロックを海中に沈め、海藻類の繁茂状況を数年間にわたって継続観察している。2 消波ブロックの表面にあえて凹みをつけ、海藻が付着・繁茂しやすくなるための工夫例。3 表面形状を凸型にした場合の海藻繁茂を調べるための素材開発も進められていた。4 研究テーマの異なるスタッフ間で密に連携をとりあうのも重要だ。5 野崎さんは学生時代から研究に打ち込んできた「コンクリート愛」を熱っぽく語る。



POWER
PEOPLE

J-POWER 茅ヶ崎研究所

◀ 神奈川県茅ヶ崎市 ▶

伝統の木工技術を 和モダンに活かす

平安時代から鎌倉時代にかけて中国から伝わったとされる桶。
江戸時代や明治時代には日用品として、日本全国で盛んに生産された。
戦後、プラスチック製品に押され、需要が激減したものの、
おひつに入れたご飯がおいしいことや酒や醤油づくりで
品質がよくなることにより、再び注目されている。
東京都内で江戸結桶の唯一のメーカーとなった有限会社桶栄川又を取材した。



洋白銀の箍がモダンな印象を与える桶栄の
オーバルコンテナ（左）と江戸桶（右）。



幸せ度を上げる刺繍の時間を

刺繍家 千葉 美波子



定番の動物や植物はもちろん、
怪獣などユニークな絵柄の刺繍
で注目されている刺繍家・千葉
美波子さん。意外にも、子ども
の頃、手芸は苦手だった。
「20代になって、刺繍が施され
たバッグが素敵だと思い、ス
テッチの基本も知らなくせに、
何となく自分でつくれそうだな
と思って始めたのが、この道に

入ったきっかけです」
初めてつくった菜の花の刺繍
のバッグ。それを持ち歩くと、
電車の中で「それ、どこで買っ
たの？」と聞かれるようになった。
た。ちょうど丁寧な暮らしがで
きる働き方をしたいと思ってい
たことから、会社員を辞め、手
仕事の道を選んだ頃だった。
「刺繍の作品づくりは時間がか

かります。でも、それは時間が
かかるのではなく、手間をかけ
られる贅沢な時間だと気づいた
のです。それで、本格的に刺繍
に取り組む覚悟ができました」
刺繍の魅力は、人と話したく
ないような苦しい時も、小さな
場所さえあれば、一人で時間を
過ごせることだといふ千葉さん。
それが生きる助けになる。千葉

さんは、自身の作品や書籍、教
室での指導などを通して、そん
な豊かな時間があることを伝え
ていきたいと願っている。

上ノ「刺繍の文化がない民族はないと言われ
るほど、その歴史は深いもの。魔よけの意味
もあり、人は潜在的に刺繍を好むのかも」と
千葉さん。下ノ恐龍をモチーフに、高度な技
術を要するカットワークを施した作品。
取材・文／ひだいすみ 写真／吉田 敬



ちば みなこ
神奈川県生まれ。会社員を経て、ネッ
トショップ「クロヤギシロヤギ」を始
める。アルファベットのデザインを中
心に刺繍作品を制作。制作活動のかた
わら、生演奏と一緒にライブ刺繍
や映画とコラボした刺繍ワークショップ
などを幅広く活躍中。
<https://www.kuroyagishiroyagi.com/>



1. 輪切りにした材料の小口に割鉋を当て、木槌で打って適当な厚さに削る。
2. 荒削りした側板はすでに曲面が出ている。
3. 側板の外側を削る内丸鉋（左）と、内側を削る外丸鉋（そとまるがんな）（右）。
4. 外丸鉋で、側板の外側を削る。
5. 数え切れないほどの鉋を使用。左の壁にあるのが、両手で持つ「銚」という刃物。



上／ワイン2本用のオーバルコンテナ。上のラインがボトルの回転を抑える機能を持つ。下／桶の下面に焼き付けられた桶栄のロゴ（江戸文字）。



桶栄を代表する江戸桶（えどびつ）7寸。洋式のテーブルの上でも使用できるように伝統的なものよりも深さが浅い。洋白銀の箍（たが）がスタイリッシュ。

モダンなデザインが 印象的な桶栄の結桶

東京都江東区にある有限会社桶栄川又は、1887年（明治20年）の創業。今年で創業136年を迎える「江戸結桶」のメーカーだ。現在の当主・川又栄風さんと4代目となる。木製の桶には曲物桶と結桶がある。結桶は、短冊状の複数の側板を箍をはめて密着させるもの。我々が「木桶」と聞いて普通にイメージするものだ。

桶栄のある深川エリアは、江戸時代には全国各地から木材が集まる貯木場・木場があることから、木工関係の職人が多く住む場所だった。川又さんが父の栄一さんに師事した1986年当時も、都内に7〜8軒の結桶の工房があったというが、現在は桶栄1軒だけとなった。戦前には、液体や生ものを運んだり、保存したりする日用品として利用された結桶だが、戦後はプラスチックの普及やライフスタイルの変化により、結桶の需要が激減した。川又さん自身も父の後を継ぐ予定はなく、一度は就職したものの、ものづくりに挑戦したい気持ちが強くなり、父に弟子入りすることを決意したという。

伝統工芸品「江戸結桶」の特長を川又さんは「国有林材のヒノキやサワラの特性により耐水性に優れ、抗菌性も高いこと。年輪が密なので濡らしても変形が起きにくく、軽くて扱いやすいこと」という。そのため、「結桶のおひつに炊きたてのご飯を入れる」とご飯を

とも調和して、モダンなデザインになった。売上げも好調で、これを機に、全国のギャラリーやセレクトショップから注文が入るようになった。

伝統を継承しつつ 自分流に工夫すること

桶栄では、製材から仕上げまで、すべての工程を1人で行うため、川又さんが全工程をマスターするには約10年がかかったという。結桶の工程は、おおよそ次の通り。

- ①材木店で自然乾燥している木材（主にヒノキの一種サワラを使う）を、つくる桶の深さに合わせて輪切り（玉切り）にする。
- ②小口に鉄製の割鉋を当て、木槌で打って、小割にする。
- ③木の特長を見抜き、効率よく割らなければいけないので、川又さんは一番難しい工程だと話す。
- ④両端に持ち手の付いた「銚」と呼ばれる刃物を使って、荒削りして側板のおおよその形を決める。
- ⑤内丸鉋を用いて、側板の外側を削る。
- ⑥大型の鉋をひっくり返したような正直鉋で側板の側面（隣の板と接する部分）を削る。この時、組み上げた時に円形になるように、自作の型に当てて、角度を確認。さらに、桶の上部と下部の寸法差（テーパー）も考慮し、やや扇形に削る。側板と側板の

保湿し、さらに余分な水分も取ってくれるので、ちょうどいい硬さのご飯を食べることができる」のだ。

日本人の米の消費量は年々減少しているものの、おいしいご飯にこだわる人が増えたため、おひつの注文はここ数年増えているのだという。

「最近の寿司店は、食材だけでなく、内装や器などにもトータルに質の高い提案をします。その流れで、弊社の品を求める店も増えました」

こうした高級寿司店で好評なのが、川又さんが考案した洋白銀の箍をはめた高級感のある結桶だ。

きっかけとなったのは、2006〜2010年に中目黒にあった日本とヨーロッパで買い付けした、インテリアライフスタイルのセレクトショップに製品を置いてもらったこと。オリジナルのアイテムを考案する中で、これまで竹や銅でつくられていた箍を、カトラリーなどに使われる洋白銀でつくってみたところ、銀の風合いが高級感を醸し、白い木目



有限会社桶栄川又
川又栄風さん



結桶の上下にガラスを入れた金魚鉢。

接合面がまさに「水も漏らさないように」ぴったり合わないといけないので、神経を使う作業だ。

⑥側板を木工用接着剤で仮留めし、真鍮製の仮輪で締める。

⑦桶の内側や外側、小口などに鉋をかけて仕上げていく。

⑧本番の箍をはめ、底板を入れて完成。

言葉でいうのは簡単だが、実際に1人でできるようになるには大変だったという。「初めは父と同じようにやっていたのですが、どうしてもうまく行きませんでした。手の大きさも腕の長さも体格も違うし、筋力も違いますからね。そこで刃の研ぎ方や刃の出し方を修正し、身体の使い方も変えて、自分流に

歌人

岡本 真帆

おかもと・まほ 1989年、高知県生まれ。四万十川のほとりて育つ。未来短歌会「陸から海へ」出身。2022年、初めての短歌集『水上バス浅草行き』（ナナロク社）を刊行。現在、東京と高知で二拠点生活をしている。リモートワークで仕事をしながら、短歌にいそむ日々を送っている。



出典：映画『千と千尋の神隠し』銭婆（ぜにーば）のセリフ

「二度あったことは
忘れないものさ。
思い出せないだけで」

日常の何気ない風景、誰かと交わした言葉、ずっと覚えていた心の揺れ。そんなはかないものを丁寧（すく）に掬い取るように詠んだ短歌集『水上バス浅草行き』が多くのファンの心をとらえている歌人の岡本真帆さん。上記の言葉は、自身が短歌をつくる時に大切にしている姿勢と重なる。

「どんな些細な経験も、無駄なものはないと思います。自分の中に蓄積されたものを見つめ、それらを残しておきたいという思いを込めて歌をつくっています」

短歌をつくり始めたのは社会人になってから。実は、学生時代に「自分にも、すぐに天才的な短歌が詠めるのでは」と思い、チャレンジしてみたが、それほど上手くいくわけもなく挫折。しばらく短歌という表現を遠ざけていた。しかし、広告制作会社で、コピーライターとして短い言葉を扱う仕事を経験する中で、自分なりの表現ができるのではないかと、再び短歌と向き合った。

「歌をつくる時に意識しているのは、自分自身に嘘をつかないこと。書いた言葉に対して本心からそう思えるか、本当に同意できるかどうかを確かめるようにしています」

同時に、表現がひとりよがりにならないようにも気をつけている。鑑賞する人に何を伝えるか、受け取りやすい形になっているか、じっくり検討している。

「短歌を鑑賞して、思い描いた景色や気になった言葉について周囲の人と話すと、きつと自分と他人の違いが浮かび上がってくると思います。それをコミュニケーションのきっかけにしてみたらうれしいです」

今は、短歌を詠むことが楽しくて仕方ないという岡本さん。今後、彼女からどんな歌が生まれ、心の琴線を揺さぶってくれるのか。早くも次の歌集が待ち遠しい。

岡本真帆さんのサイン本をプレゼントします。詳しくはP.43を。



1. 正直鉋で側板の側面を削る。
2. 型に合わせて、側面の角度を確認する。
3. 木工用接着剤で仮留めし、仮輪をはめる。
4. 仮輪をはめて自然乾燥させている状態。
5. 洋白銀の箍と白木の組み合わせがモダンな印象を醸す。

実用品であることに こだわりたい

調整しなければいけないということに気づいたのが3〜4年してからですね。それからは「腕が上がった」ことが実感できました」

川又さんは、ものづくりのおもしろさは、毎日同じものをつくり続ける中で、こうすればうまくいくという発見や、今日は昨日よりもうまくできた実感できることだという。

「同じものを何個つくっても完璧ということはないのですが、それでも進歩していることを実感した時は楽しいですね」

桶栄の製品はこの十年くらい、国内外の美術館の企画展やデザイン展などに招聘されることが多い。

「単なる伝統工芸品や生活雑貨ではない『海外にも通じる、日本の現在が表現されている意匠』ととらえられているのではないかと川又さんは語る。

だが、川又さんはあくまでも「実用品」にこだわりたいという。

「丈夫で使いやすい、伝統の素材と技法、その特性を活かしたもののづくりをした上で、形の美しさも表現したい」

そのためには、現在のライフスタイルに合った製品の開発やバージョンアップが欠かせない。

「例えば、日本人はお米をあまり食べなくなったのでおひつは昔のような大きいものは

必要ありません。さらに、多くの人はテーブルで椅子に座って食事を取るわけですから、おひつをテーブルに置くことを想定すると、高さは低いほうが使いやすい」

こうした考えに基づき川又さんが考案したのが、現在の江戸櫃だ。

他社が廃業する中で、桶栄が事業を継続できている理由を川又さんは、次のように話してくれた。

「今では入手が困難な上質な稀少材を継続して提供してくれる材木商がいること、時間と手間がかかる伝統技法をあきらめずにやり続けたこと、そして定番商品でも時代に合ったマイナーチェンジをくり返したこと、さらに特殊なオーダーにも対応したことが、製品をバージョンアップさせたと思います」

現代人のライフスタイルに合わせた、実用的なものをづくり続けたいという川又さん。これからもものづくりのおもしろさを楽しみながら、伝統の技を活かした製品をつくり続けてくれることだろう。

有限会社桶栄川又

東京都江東区にある木工芸品の工房。1887年明治20年の創業。現在の川又栄風さんは4代目。先代は風呂桶やおひつなどの生活用品を中心に製造していたが、栄風さんは、現代人のライフスタイルに合わせた製品を開発・製造している。
<http://www.okaei.jp/>

取材・文／豊岡 昭彦 写真／斎藤 泉

取材・文／ひだい ますみ 写真／竹見 脩吾

第71回 定時株主総会を開催

J-POWERは、6月28日、東京プリンスホテル（東京都港区）にて、第71回定時株主総会を開催しました。

当日は午前10時に開会となり、まず、監査報告や第71期の事業報告、連結計算書類の内容などの報告を行いました。

続いて、第1号議案 剰余金の処分の件、第2号議案 取締役（監査等委員である取締役を除く。）12名選任の件、株

主提案である第3～4号議案 定款一部変更の件を上程しました。質疑・審議の後、議案の採決を行った結果、第1～2号議案は原案どおり承認可決、第3～4号議案は否決され、午前11時45分に閉会しました。

本総会終了後の取締役会において役員の新体制は右のとおりとなりました。

取締役新体制	
代表取締役会長	渡部 肇史
代表取締役社長 社長執行役員	菅野 等
代表取締役 副社長執行役員	杉山 弘泰※
取締役 副社長執行役員	萩原 修 嶋田 善多 笹津 浩司 倉田 一秀（新任）
取締役 常務執行役員	野村 京哉 関根 良二（新任）
取締役	伊藤 友則 ジョン ブカナン 横溝 高至（新任）
取締役 監査等委員	福田 直利 藤岡 博 中西 清 大賀 公子

※ 代表取締役新任

2022年度連結決算

J-POWERグループの2022年度連結決算は、売上高1兆8,419億円、経常利益1,707億円、親会社株主に帰属する当期純利益は1,136億円となりました。

● 経営成績

(1) 収益

電気事業の販売電力量は減少しましたが、電力販売価格の上昇等により、売上高（営業収益）は前期に対し69.8%増加の1兆8,419億円となりました。これに営業外収益を加えた当期経常収益は前期に対し68.6%増加の1兆8,666億円となりました。

(2) 費用

電気事業の火力の燃料費や他社購入電源費の増加等により、営業費用は前期に対し66.2%増加の1兆 6,580億円となりました。これに営業外費用を加えた当期経常費用は前期に対し64.0%増加の1兆 6,958億円となりました。

(3) 利益

当期経常利益は、石炭販売価格の上昇による豪州連結子会社の増益等もあり、前期に対し134.5%増加の1,707億円

となり、法人税等を差し引いた親会社株主に帰属する当期純利益は、前期に対し63.1%増加の1,136億円となりました。

● 財政状態

(1) 資産の部

流動資産の増加や円安の影響等により、前年度末から2,965億円増加し3兆3,626億円となりました。

(2) 負債の部

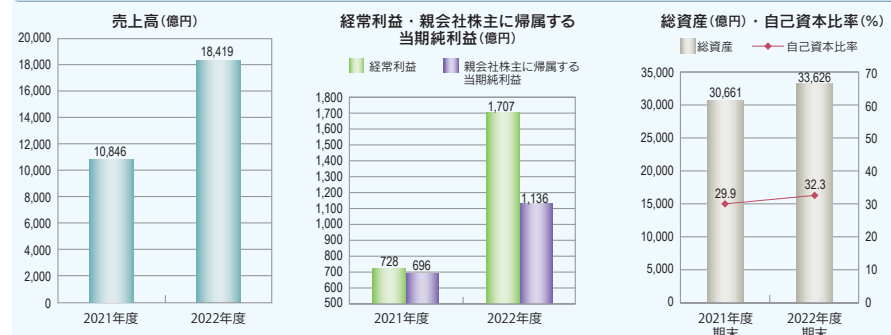
前年度末から678億円増加し2兆1,699

億円となりました。このうち、有利子負債額は前年度末から993億円増加し1兆8,858億円となりました。なお、有利子負債額のうち3,050億円は海外事業のノンリコースローン（責任財産限定特約付借入金）です。

(3) 純資産の部

親会社株主に帰属する当期純利益の計上に加え、為替換算調整勘定や繰延ヘッジ損益の増加等により前年度末から2,286億円増加し1兆1,927億円となりました。

● 経営指標



小島 なお
東京都出身。NHK Eテレ「NHK短歌」選者。2004年、角川短歌賞受賞。2007年、第一歌集『乱反射』により現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞受賞。2020年4月、第三歌集『展開図』刊行。居合道三段。

「音」のソノリティ」を詠む

—— チ ャ ン コ コ ——
（長崎県五島市）

歌人 小島 なお



長崎県指定無形民俗文化財。腰蓑は、ヒローの葉か蒲の葉でできており、首から下げた太鼓をたたきながら踊る。

写真：黒岩 正和／アフロ

チ

ヤン、チチ、チャンチャン、チチ。コンコン。ヤー、レー、ヤー、オー。

長崎県五島市福江島。毎年旧盆の8月13日から3日間、「チャンココ」の鉦と太鼓の音が集落に響く。「チャン」は鉦、「ココ」は太鼓の音と言われる。島に伝わる古い念仏踊りで、踊り手たちは半袖の襦袢に腰蓑、花笠を被り、太鼓をたたきながら、重鉦と小鉦の音と歌声に合わせて踊る。初盆の家の前や墓を回り、先祖の御霊を鎮めるという。

1187年にはすでに行われていたというが、その起源ははっきりとはわかっていない。南方系の情緒あるエキゾチックな踊りが特徴。踊り手は成人男子に限定されており、長い歳月を親から子の世代へ受け継いできた。周りを海に囲まれた島には、独特の時間と伝統が脈々と息づいている。

※「音のソノリティ」第944回放映（チャンココ）を観て詠んでいただいたものです。J-POWERグループは、長崎県で松島火力発電所や松浦火力発電所などを運営しています。

音のソノリティ

J-POWERは、首都圏などで放送中のミニ枠テレビ番組「音のソノリティ」～世界でたった一つの音～を提供しています。「ソノリティ」とは、フランス語の音楽用語で「鳴り響き」の意味。日本の自然風景から、その場所できくことのできない音を紹介しています。

日本テレビ系列
毎週日曜日 20:54～など
BS日テレ
毎週水曜日 20:54～（再放送）

JR東日本びゅうツーリズム&セールスと連携した インフラツアーの企画・開催

J-POWERは、東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）グループである株式会社JR東日本びゅうツーリズム&セールスと連携し、水力発電施設の見学を組み込んだ鉄道の旅行（インフラツアー）を企画・開催します。

本ツアーは、昨年10月に全線で運転再開した只見線を利用した鉄道の旅行企画に、J-POWERの設備である只見展示館でVR（バーチャリアリティ）システムを利用し水力発電の仕組みを学んだり、只見・田子倉各水力発電施設を間近で見て発電所を体感したりと、只見線沿線の車窓から見る自然を満喫しながら、ツアー参加者や開催地域の新たな発見や価値を提供することを目指します。

昨年も開催したツアーでは参加者および開催地域関係者の皆さまから大変ご好評をいただきましたので、今年も内容のより一層の充実を図り実施します。

J-POWERは今後も、「環境との調和をはかり、地域の信頼に生きる」という企業理念のもと、地域との共生を目指し、地域貢献活動に取り組んでいきます。

JR東日本びゅうツーリズム&セールスと連携したインフラツアー概要	
日 時	2023年7月29日（土）～30日（日）
行 程	1日目 東京駅～郡山駅～会津若松駅～只見駅（只見町宿泊） 2日目 只見町観光施設～只見展示館、只見・田子倉 各水力発電施設～田子倉湖～新白河駅
実施主体	株式会社JR東日本びゅうツーリズム&セールス

見学を実施する施設



只見展示館

VR（バーチャリアリティ）システムを利用した発電所見学、田子倉ダム、発電設備の模型類、ドローン空撮映像により、ダムや水力発電など、水とエネルギーについて学ぶことができます。

住 所 福島県南会津郡只見町大字只見字後山 2476-230
開館時間 9:00～16:30 休館日：毎週水曜日、冬季（11月中旬～4月下旬）

只見発電所、只見ダム



田子倉発電所、田子倉ダム



鬼首地熱発電所の営業運転開始

～栗駒国定公園における地熱発電設備の更新を完了し地域とともに運転を～

J-POWERは、鬼首地熱発電所（宮城県大崎市）の更新工事を進め、このたびすべての工事を終了し、4月2日より営業運転を開始しました。

本発電所は、1975年に運転を開始し、建て替えのため、2017年に停止しましたが、今般すべての設備を一新し、発電を再開しました。

タービン・発電機には地域の伝統工芸品である「鳴子こけし」をあしらうなど、地域の発電所として親しまれ、地域に貢献する発電所運営を目指します。

地熱発電は、温室効果ガス排出量の最も少ない発電方式の一つであり、自然

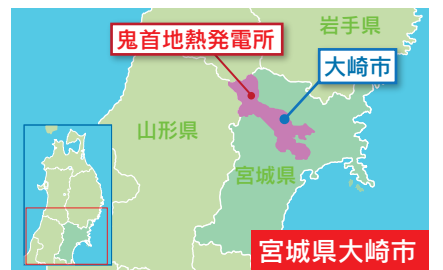
条件によらず安定的な運用が可能な純国産の再生可能エネルギーです。

J-POWERグループでは、今後も地熱発電の持続的な開発と安定運転に努めていきます。



発電所全景

発電所概要	
発 電 所 名	鬼首地熱発電所
所 在 地	宮城県大崎市
出 力	14,900kW
工 程	2019年4月 工事開始 2023年4月 営業運転開始



位置図

京都フュージョニアリング株式会社へ出資

J-POWERは、京都フュージョニアリング株式会社に対して出資しました。

京都フュージョニアリングは、核融合炉関連装置・システムの研究開発およびプラントエンジニアリングを担う京都大学発のスタートアップ企業です。プラズマ加熱装置、熱取り出しブランケット、高性能熱交換器、水素同位体ポンプをはじめとした先端核融合工学分野において世界有数の技術力を有しており、世界初となる「核融合炉からの熱取り出し」並びに「発電」に用いられる一連の特殊機器を核融合発電所の実環境に近い条件下で統合的に開発試験する核融合発電試験プラント「UNITY」（Unique Integrated Testing Facility、独自統合試験施設）の建設を進めています。

J-POWERは今回の出資により、京都フュージョニアリングの事業を支援します。京都フュージョニアリングの事業は、気候変動やエネルギー安全保障といった社会課題解決に寄与するものであり、

その技術開発はJ-POWERが取り組む発電事業、水素製造事業においても新たな価値をもたらすことが期待できます。今回の出資を契機に、京都フュージョニアリングが持つ核融合のエンジニアリン

グ技術とJ-POWERの発電事業においてこれまで培ってきた技術やノウハウを融合して、フュージョンエネルギーの実現を加速させ社会に貢献していきます。



プラズマ加熱装置（ジャイロトロロン）

京都フュージョニアリング株式会社 概要	
会社名	京都フュージョニアリング株式会社 (Kyoto Fusionneering Ltd.)
U R L	https://kyotofusioneering.com/
設 立	2019年10月1日
事 業 内 容	核融合炉関連装置・システムの研究開発およびプラントエンジニアリング



核融合発電試験プラント「UNITY」

読者プレゼント

「Home of J-POWER」を執筆いただいている小説家・藤岡陽子さんの最新刊『リラの花咲くけものみち』（光文社）と、「Power of Words 私の好きな言葉」に登場いただいた歌人・岡本真帆さんの著書『水上バス浅草行き』（ナナログ社）の著者サイン入りの書籍をプレゼントします（ご応募いただいた方からそれぞれ抽選で3名様。お1人様1冊まで）。

応募方法

①郵便番号 ②住所 ③氏名 ④本誌の印象的だったコーナーやご感想 ⑤希望する書籍名を明記の上、2023年9月7日（木）までに郵便はがき（当日消印有効）で下記住所「J-POWER『グローバルエッジ』編集室 読者プレゼント係」宛てに、または下記メールアドレス宛てにご応募ください。なお、当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。個人情報、プレゼントの発送のためにのみ使用させていただきます。



2023年7月18日発行（非売品）
発行：電源開発株式会社
〒104-8165 東京都中央区銀座6-15-1 TEL:03-3546-2211(代表)
URL: <https://www.jpowers.co.jp/> e-mail: globaledge@jpowers.co.jp
編集・発行人：広報室長 下田 総一郎

